The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	The Question of Identify in the Work of Henry James : Writing on Ghosts and Writing of Ghosts
Author(s)	齊藤, 園子
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49212
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【6】

氏　　名	齊　藤　園　子（さい とう その こ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学 位 記 番 号	第　２１５０９　号
学位授与年月日	平成 19 年６月 28 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学 位 論 文 名	The Question of Identity in the Work of Henry James：Writing on Ghosts and Writing of Ghosts （ヘンリー・ジェイムズの作品におけるアイデンティティの問題－幽霊による、幽霊についてのエクリチュール）
論 文 審 査 委 員	（主査） 教　授　木村　茂雄 （副査） 教　授　仙葉　　豊　　准教授　里内　克巳

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、ヘンリー・ジェイムズの作品のうち、作家や芸術家に関する作品を主な対象に、アイデンティティの確立とその崩壊の諸問題を扱う。ジェイムズは多作で知られる小説家であるが、「書く」行為への洞察に富んだ作家論や小説論も数多く残している。また、作家や芸術家を題材とした作品は、「書く」活動に携わる作家としてのジェイムズ自身の存在や活動を、作中人物として客観化し省察した自己再帰的（self-reflexive）な作品といえる。ジェイムズはその執筆物において、一方では、作品の起源、所有者、帰属先としての作者の権威を表明している。しかしもう一方で、アイデンティティを確立しようとするその語りの只中に、アイデンティティ崩壊の契機が記録されていることに本論は注目する。ジェイムズの分身としての作中作家や芸術家には、アイデンティティの確立に対するジェイムズの不安が抑圧された形で刻印されているのである。

本論文は三部から成る。第一部は、テクストの表象におけるアイデンティティの問題を扱う。

まず第一章では、ジェイムズの作品中に頻出する「書かれた物」、すなわち「手書き原稿」と印刷物がどのように表象されているかに焦点をあてる。そもそもテクスト上の表象は、多くの場合、何らかの意味の起源として描かれているわけではない。たとえば、作品中の手書き原稿は作者の権威の象徴であるが、それは決して現前することがない。それは、ジェイムズ作品中の幽霊と同様、語りの中に曖昧に存在するだけである。しかしそれでも、手書き原稿は「オリジナル」として、読者や批評家の追求の対象となる。結果的に手書き原稿は、起源とその同一性を欠いたまま、語りを増殖し拡散しながら、語りの中で再生産されていくのである。

第二章では、芸術作品における表象のアイデンティティの問題を扱ったジェイムズの短編“The Real Thing”（「ほんもの」）と小説論“The Art of Fiction”（「小説の技法」）を取り上げる。“The Real Thing”においては、芸術作品における表象と現実の境界に混乱が生じている。イラストレーターを生業とする第一人称の語り手によれば、芸術作品における表象とは、現実をそのまま写し取るというよりも、「表象されたものを表象する」活動なのだ。したがって、「ほんもの」である貴族がイラストにおいて貴族を表象しうるわけではない。逆に、現実には貴族とかけはなれた庶民階級のモデルが貴族を表象しうるものとなる。ここで追求されているのは、コピーがオリジナルに取って代わるプロセスである。最終的に貴族が「何にでもなる」と宣言するように、この世界は結局コピーのみの世界であってみれば、コピーがいかにしてコピーのままオリジナルになるかという問題を追究しているといえよう。これは、

「選択と比較の問題」として芸術を扱うという、「小説の技法」におけるジェイムズの姿勢とも関連する視点といえる。しかし、「見えたものから見えていないものを推測する」というジェイムズの有名な言葉は問題も含んでいる。というのも、コピーのオリジナル化を扱う際に、形式からの解放を称揚しながら、一方では形式への希求とも思えるステレオタイプ化の傾向も見られるからである。

第二部では、特に「作者」と「読者」の間で行われる作品のアイデンティティをめぐる交渉に注目する。そこでしばしば見られるのは、作中の作者が、何らかの形で、作品に対する支配権の危機を経験するというパターンである。書くことの権威は、読まれることによってつねに覆される可能性を持っている。そもそもテクスト上の表象は、さらなる表象によってのみ理解されるのであり、作品の同一性の維持は、これらの「読み」の介入によって困難なものとなる。読む行為は潜在的に書き換えの行為なのである。作品の表象を巡って作者と読者は交渉を行うのであるが、そこで作者は作品の権威に対する独占権を主張することはできない。むしろ、読者と作者との境界自体、次第に曖昧化されていくのである。

第三章では、*In the Cage*『檻の中』を中心に、電信局で働く女性電信士による「読むこと」と「書くこと」の実践について論じる。電信士は、貴族階級と労働者階級という「構造」のギャップを象徴する電報局の檻の中にいる。電信士はそのギャップを、極端に短縮化ないし暗号化された電信文を「読む」ことによって埋めていく。そして、電信士の読みの逸脱には、読むことと書くこととの複雑な関係において現実が構築されていく過程が浮き彫りにされているのである。

第四章では、“The Middle Years”（「初老」）と“The Death of the Lion”（「流行作家の死」）を主な材料に、作家の作者としての権威が読者との関係の中で侵食されていくプロセスを検討する。両作品には、一見、作家に忠誠的な読者が登場する。こうした登場人物は、従来の多くの批評においては、作家の作者としてのアイデンティティを強化する存在と解釈されてきた。しかし本論では、作家に対し最も従順であるかのような読者ですら、作家の作者としての領域を侵害する存在であることを指摘する。たとえば、“The Middle Years”で描かれる作家デンコムは、「読み」が生み出す作者の意図からの逸脱を恐れているが、しかし読まれることがなければ、作品は完了しない。孤高のうちにアイデンティティを確立することは不可能であり、作家は読者との関係の中でしか定義されえないのだ。そこでデンコムは、潜在的な、読みという「幽霊」によって作者の権威が侵害されることを排除するため、テクストの改訂を続け、作品のアイデンティティを決定不可能な状態に保とうとする。また、“The Death of the Lion”では、作家の創造性とは無関係に機能していく「作家」という言説のアイロニーも描かれている。これらの作品の中で作家は死ぬ運命にあり、結局は書くことをやめる。しかし、実在のない手書き原稿と同様、その存在は「語り」の中で曖昧によみがえり、読者に絶えずつきまとい続けるのである。

また、第五章では、ジェイムズが晩年に出版したニューヨーク版の出版に関して、その作者と読者のアイデンティティの重複という点に照明を当てる。作中作家が読者との関係において経験したアイデンティティ崩壊の感覚は、ジェイムズ自身にも共通するものである。長年、ジェイムズ文学の象徴とみなされ、その作家としての権威を存分に発揮して構築されたはずのニューヨーク版の権威は、しかし、その権威の揺らぎにこそ基づいたものといえる。ここでの改訂の行為は、ジェイムズ自身の同一性の崩壊、そして作者と読者との間の境界の曖昧さを示している。この崩壊の感覚を持つがゆえに、ジェイムズは以前の自分と改訂時の自分との一貫性を語り、作者の強い権威を語るのである。また、ニューヨーク版の出版過程は、様々な「作者」主体の存在を示唆している。それはテクストの作者としてのジェイムズだけでなく、当時の出版業界に関わる諸主体が、その法的枠組みの中でそれぞれ作者の役割を果たすことによって実現されたものといえる。この問題は、広くは著作物における著作権の問題、装丁の問題、執筆物の所有や帰属の問題について考察を深める契機ともなるだろう。

第三部は、ジェイムズ自身の読みの実践に着目する。

第六章では、*The Aspern Papers*（『アスパン文書』）における一人称の語り手の企てについて検討する。語り手は、ジェフリー・アスパンという過去のアメリカ人詩人の文学的成果に関心を持つ読者兼批評家である。彼は、アスパンの精霊を祭る司祭の役割を自負し、この詩人を、アメリカ文学の祖として祭りあげることを試みるのである。これは具体的には、アスパンの遺稿とされる恋文を手に入れることで、過去の詩人アスパンを自身の企てに都合の良いように読み替え、また書き換えてよみがえらせる企てとなる。しかし、アスパンの恋文は、語りの中に存在するのみであり、起源を持たない。恋文は語りの連鎖の中においてのみ、そのアイデンティティを強化していく。つまりそれは、恋文の消滅を語るティーナの語り、*The Aspern Papers*という語り手の語り、さらには、この中篇を読む批評家

の語りをも生み出していくのである。

第七章では、*The Aspern Papers* に見られた語り手の読みの実践が、ジェイムズの執筆活動のパロディでもあることを論じる。特に、ジェイムズの初期の伝記 *Hawthorne*（『ホーソーン』）は、彼の強力な先行者、ナサニエル・ホーソーンのジェイムズによる読み替え・書き換えといえる。そして彼が読者・批評家としてホーソーンを批評する時、彼はホーソーンの幽霊を、彼自身が必要とする伝統の鋳なおしのために利用しているのである。ジェイムズはホーソーンを、アメリカ土着の作家でありながらヨーロッパの文化的伝統と共通する要素を持ち合わせた作家として語る。このジェイムズの語りは、その後のアメリカ文学史の語りを生み出していったという意味で、起源のない語りが持つ実効性を示しているといえよう。その一方、その鋳なおしは、西洋の「様々な国民性」を同質な型に鋳なおそうとする、ステレオタイプ化の思考をも内包している。しかし、西洋とアメリカという二項対立が打ち崩されようとするとき、ジェイムズの作品には、ぼんやりとした第三の空間があらわれる。この空間は「東方」「東洋」「中国」などといった言葉で不明瞭に指示されているにすぎない。しかし、後期に至るにしたがい、この空間はより具体的な地理的、歴史的、政治的背景とともに小説の中に取り入れられていく。最終的に、同質的なアメリカ性というヴィジョンは妄想に終わり、むしろ、ヨーロッパやアメリカの二項対立の枠組みでは捉えきれない無数の境界が立ちあらわれることになるのである。

書くことによって作家の権威を築き上げること、あるいは個人としてのアイデンティティを確立すること、そしてそのことによって、失われた「確かなもの」を取り戻そうとするモダニズム的な試みは、ジェイムズにおいては失敗に終わったといえよう。書くことによるアイデンティティ構築の行為は、まさに「書くこと」の内部において細分化され、脱構築されていく。むしろ、ジェイムズ作品が示唆する主体のあり方は、いわゆるポストモダンの主体のあり方に近いものといえよう。それは何らかの土地に根ざしたアイデンティティというよりも、時代に属し、時代とともに変容するアイデンティティのあり方を示唆している。ジェイムズ作品は、起源を欠いたまま、語りの連鎖を生み出すことによって、その文学的地位を確立してきたといえる。しかし作者は、語りの中の様々な幽霊をとりまとめる神の位置にいるわけではなく、それらの幽霊のひとつになることによって、その権威を維持している。過去と現在が共存する語りの中で、作者はその変容する幽霊的なアイデンティティにより、いまも読者との交渉を続けているのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、「アイデンティティ」という語がカバーする広い意味範囲を踏まえつつ、ヘンリー・ジェイムズにおけるアイデンティティ構築とその破綻という問題について多角的に論じたものである。

従来のヘンリー・ジェイムズ研究においては、イギリスに帰化したアメリカ人作家としてのジェイムズにおける文化的アイデンティティの模索という側面に議論が集中しがちであったが、本論文は、文学テクストそのものの同一性の危うさ、「オリジナル」と「コピー」との逆転現象（第１部）、テクストの意味解釈をめぐる作者と読者との交渉、『ニューヨーク版全集』の編纂による作家的権威の確立の試み（第２部）などの問題をそこに絡ませ、近代小説の“Master”としての彼のアイデンティティがいかに構築されたか、またその過程において、それ自身の脱構築の契機がいかに内包されることになったかを論じており、そこに本論文のもっとも大きな特徴が認められる。その議論は作品テクストの綿密な解読に裏付けられており、たとえば、*In the Cage* の女性電信士による「読むこと」と「書くこと」の実践が「現実」を構築していくプロセスを分析した第３章など、注目すべき作品解釈を生み出している。

第３部では、「アメリカ」ないし「アメリカ文学」という集合的・文化的なアイデンティティ構築の問題に関心が移るが、*The Aspern Papers* におけるアメリカ人詩人の「遺稿」探索をめぐる物語とジェイムズの Hawthorne 論との関係を鋭く突いた議論（第６章から第７章）は、文化的なアイデンティティ構築の問題を、文学テクストや作家存在の同一性という前半の関心に巧みに関連させつつ論じていて、本論文でもとくに秀逸な議論と評価できる。

脱構築的なテクスト解読と文化的アイデンティティへの問題関心が、全体としてより有機的に結びつけられたならば、本論文はさらに完成度の高い論文になったといえるかもしれないが、そのことによって本論文の価値が損なわれるわけではない。

以上のように、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分価値あるものと認められる。